

近年、注目されているスポーツ指導における「アスリート・センタード」の考え方についての講習に参加する機会を得ることが出来た。その中で講師の伊藤雅充先生(日本体育大学)が言った:「好きこそもの上手なれ」のフレーズが妙に新鮮に聞こえた。これまでに何度も聞き慣れているはずのフレーズ。私自身この根本原則を見失ってはいいのだろうかと改めて自らの取組を見つめ直すきっかけをいただいた気がした。

子供の頃、私も運動することが「大好き」だった。身体を動かすことが気持ちよかった。幼少期に剣道と出会い門をたたいた。小学校低学年の頃、週三回の稽古日が待遠しかった。稽古の日は朝からワクワクしていたことが懐かしい…。剣道の稽古そのものというよりは、稽古前のひと時、門下生たちとの「鬼ごっこ」や「だるまさん」「馬飛び競争」など実に自由に遊べる時間が何より楽しかったのである。低学年の頃までは、稽古も基本動作の反復で、ありったけの声で「コテ、メン、ドウ」を叫んでいけば褒められた。誰かが褒められると、門下生同士さらに競って大きな掛け声をかける。館長先生はその光景に嬉しそうな顔をする。しかし、高学年になり、面を付けての稽古が始まると途端に稽古が厳しくなった。稽古前の自由時間も無くなり、道場につくと低学年と入れ替えて、即私たちの稽古(四年生以上)が始まる…。大きな声だけでは褒められなくなった…。中学生や先生方と打ち合うようになり、打たれるだけの稽古が嫌だった。かと言って、あからさまに打たせてくれる稽古もつまらない。徐々に稽古日のワクワク感がなくなっていく。その後、憂鬱さに変わり二十年以上も付き合うこととなる(笑)。

ただ不思議と止めるという選択はしなかった。中学校以来、ずっと剣道部に所属し、社会人になっても続けてきた稽古。私の場合、教員であったため、学校で毎日稽古ができる環境にあり、週に五日以上、ほぼ毎日稽古が出来た。部活以外にも稽古場を見つけて仲間との稽古をするようになった。三十歳を過ぎた頃からだろうか:剣道がまた楽しくなってきたのである。コロナ禍の影響で今はほとんど出ていないが:。稽古がしたくて、夜な夜なひとり、庭で竹刀を振る。時折通る近所の人からは、怪しい人に見えないだろう。

小学校低学年の頃のワクワク感から長い憂鬱な時期をへて、再びワクワクに帰る…。この不思議な:いつの間にかの「心もち」の変化。私にとって稽古は趣味であり、やってもやらなくてもいいことである。しかし、教員として教え子たちとの稽古は、仕事なのか?趣味なのか?この境界が実に曖昧である。そもそも純粋に趣味が仕事に転じている人はどのくらいいるのだろうか?芸術や文学の世界の創作者たちやアスリートは、そう言えるかもしれないが:もともと趣味として関わっていたかどうかは明確ではない。そう考えると、大きく二通りのタイプがあるのではないだろうか。

一つは、「好きでしていたことが仕事として成立した人たち」である。このタイプの人は、好きこそもの上手なれ的な促しに身を任せているうちに卓越した技能を身に着け、尚且つチャンスを探み、進化を続けるタイプの人たちである。例えば、歌手、芸術家、小説家などの自らの知的・感性的な「学び」からアイデアを構成し、作品へと昇華させ、且つその作品が世の中で他の人々の心を掴む、いや掴み続けることが出来る人たちだ。そうでなければ、仕事としては成り立たないはず…。趣味の域を出ない卓越者はあまたいるが、それを仕事としている人たちとの隔たりは想像以上に大きいのかも知れない。

もう一つは、仕事が趣味に転じたタイプの人たちである。世の中にはこのタイプの人の方

が多いように思う。例えば、ドラマ「ドクターX」に出てくる外科医大門未知子は、趣味手術、特技手術だ。自らの腕を卓越した技能にまで磨き続け、「私失敗しないので」との決め台詞…。彼女のようなドクターが現実にいるとは思えないが、似たようなタイプの医者はきつといるだろう。「神の手」と称されるスーパードクターを追ったドキュメントも少なくない。極端な例えだが、医師になる前に執刀医になることはできないのである。医師となり、天性のセンスとも相まって、外科医としての経験を積みつつ卓越するしかない。結果として趣味手術、特技手術、職業外科医が成立するのである。

それぞれのタイプに共通するのは、卓越した仕事をするという事である。仕事⇨趣味という図式を公に言えるようになり、それを世の中が受け入れ、時には称賛されるようになってから、それほど時間は経過していない。少なくとも私の親世代（団塊）には、この図式を不謹慎に思う人も少なくない。高度成長期のサラリーマン世代にとって、仕事とは？まさに会社のためになることをし、自分を抑えて会社のために尽くすことがいい仕事とされ、また、そのように教育されてきた。しかし現在の保健の教科書には、ライフワークバランスなるワードが明記され労働と家族生活、自分の時間のバランスの必要性について学ぶ。それが自己実現の過程を充実したものにすると。政府は働き方改革を推し進める。

数年前、自分のクラスで労働と健康について話をした時のことだ。仕事と家庭、趣味や気晴らしのバランスが必要という教科書の内容に異議を唱える生徒がいた。言い分はこうだ。

先生、バランスの具体例を挙げてほしい。一日のうちの八時間は仕事、八時間は家庭、その中に趣味や気晴らし？八時間は睡眠ですか？バランスが大事というのであれば、これ以上のバランスはないですよ。つまり、日々の仕事の基本定時に終われる前提ですね？きつと僕には出来ません。バランスとは何ですか？

久々に苦しい変化球が視界の外から飛んできた感じでした。何とか返すことはできると思った。でも、私は、その質問を引き取ることにした。「来週まで考えさせて、来週も答えになつてないかもしれないけど…時間をください」と教師が宿題を持ち帰る羽目になった。

それから数日間、宿題返しの思索に耽った…その生徒が、「日々の仕事を定時で終わることはできない」という真意は何か？実に優れた思考を持つ生徒で、かつ嫌味がない。リーダーとしての資質を感じさせる人物である。仕事が遅くて帰れないと言っているわけではない。実に柔らかな言い方であったが、「先生、俺たちを舐めないでくださいね！この学校の精神は世の中を救済せんがために尽力する人間を輩出することでは？」と言われている気がした。

次の週、宿題を返した…

みんなはね。教科書にあるようなバランスで人生を送れるとは思わない方がいい。人生の時々で世の中の動向を見定めつつ、それぞれの舞台で人類に寄与する人材になるのだろ。

つまりは、自分のライフワークバランスはもとより、グローバルに宇宙的視野でバランスよく活躍しているはず。みんなはね。そんなハードワークも「ゆとり⇨余力」もってさばける力を身に着けなければならぬんです。仕事が好きなことだといいいね。「好きこそもの上手なれ」とか言うでしょ！そうすればさあ、物理的時間のアンバランスを精神的充実が凌駕する…ような…ん。やっぱり答えにならない。すまん。

生徒たちの反応は様々だった。宿題をくれた生徒は黙っていた。それでも、やや嬉しそうに見えたのは気のせいかな…。みんなの、彼の十年後の活躍に思いを馳せつつ…。